スクリーニングにおける要精検例および クレチン症例の抗甲状腺抗体保有率

北海道大学医学部小児科　松浦　信夫
野原八千代
札幌市衛生研究所　高杉　信男
福士　勝
北海道衛生研究所　市原　侃

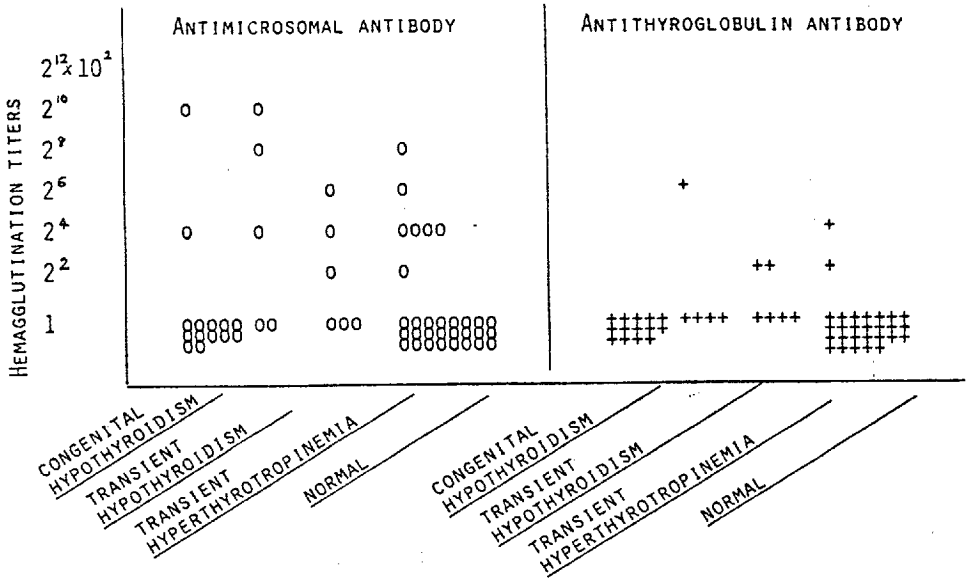
従来より先天性甲状腺機能低下症の発生に種々の抗甲状腺抗体が関与しているのではないかと考えられてきたが，結論は得られていない。すなわち本症の児および母親の抗甲状腺抗体保有率が正常対照に比し有意に高いことから，母親甲状腺自己抗体が経胎盤的に胎児に移行し甲状腺形成異常の発症に何らかの影響をあたえているのではないかという考え方がある。一方抗体陽性者の妊娠経過をみると出生した児の多くは全く異常がないことから反対の意見も多い。そこで今回は，スクリーニングで要精検となった児について母児の抗甲状腺抗体保有率の検討を行ない，要精検になる因子に抗体保有が何らかの関与があるか検討してみた。

対象は，先天性甲状腺機能低下症のスクリーニングでTSH高値，あるいはTSHは正常であるがT_4低値，TBG正常のため本症を疑われ精検を行い，かつ母児ともに抗体検索の行い得た症例53例である。精検初診時に母児ともに甲状腺機能検査および抗マイクロゾーム抗体，抗サイログロブリン抗体を検索した。抗マイクロゾーム抗体，抗サイログロブリン抗体は，間接血球凝集反応を用いた富士臓器のキットを使用した。前者は400倍以上，後者は100倍以上を陽性とした。

53例中先天性甲状腺機能低下症と診断されたものは14例，そのうち抗体陽性者は2例（14.3%）で1例は合成障害，1例は異所性甲状腺であったが母親が慢性甲状腺炎で治療中の例である。一過性甲状腺機能低下症は5例，うち抗体陽性者は3例（60%）で，1例は母親が慢性甲状腺炎でTSH binding inhibitory immunoglobulin（TBII）が陽性であった例であり，生下時より甲状腺剤による治療を要した。他の2例は母親が甲状腺機能亢進症のため抗甲状腺剤を服用していた例であり，未治療にて甲状腺機能は回復した。一過性高TSH血症およびその疑で経過観察中の者は6例で，抗体陽性者は3例（50%）である。残りの28例は精検時甲状腺機能は正常であったが抗体陽性者は8例(28.6%)であり，そのうち4例の母親は亢進症の診断はなされていないが，甲状腺ホルモンはT_3，T_4値とも明らかに高く，また1例はTBII陽性のatrophic autoimmune thyroiditisで甲状腺機能低下を示していた。

以上53例の抗体保有率を総めてみると，抗体陽性者は53例中16例30.2%であった。これを抗体別にみると，抗マイクロゾーム抗体陽性者は15例28.3%，抗サイログロブリン抗体陽性者は5例9.4%，両者ともに陽性の者は4例(7.5%)であった。抗体陽性例16例のうち，先天性甲状腺機能低下症を示した例は2例（12.5%）にすぎずこの結果でみるかぎりにおいては，甲状腺抗体が本症の発生原因に

関与していることは考え難い。しかし要精検となった児の抗体保有率は，新美らの報告した正常健康児の抗甲状腺抗体保有率，抗マイクロゾーム抗体1.40%，抗サイログロブリン抗体0.89%を明らかに上まわるものであり，また，抗体陽性者の母親の甲状腺機能に異常がみられるものが多いことから，新生児期，乳児期の甲状腺機能が，母親の甲状腺機能に強い影響をうけていることは確かであり，甲状腺機能低下症のスクリーニングの今後の問題点となると思われる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

従来より先天性甲状腺機能低下症の発生に種々の抗甲状腺抗体が関与しているのではないかと考えられてきたが,結論は得られていない。すなわち本症の児および母親の抗甲状腺抗体保有率が正常対照に比し有意に高いことから,母親甲状腺自己抗体が経胎盤的に胎児に移行し甲状腺形成異常の発症に何らかの影響をあたえているのではないかという考え方がある。一方抗体陽性者の妊娠経過をみると出生した児の多くは全く異常がないことから反対の意見も多い。そこで今回は,スクリーニングで要精検となった児について母児の抗甲状腺抗体保有率の検討を行ない,要精検になる因子に抗体保有が何らかの関与があるか検討してみた。